

## 【論文】

## 鎌倉時代中期における鎌倉の密教

永井 晋

## 【キーワード】

鎌倉・密教・九条家・園城寺戒壇問題

## 【要旨】

承久元年に起きた公暁の源実朝暗殺によって、鎌倉の密教は再編をせまられることになった。四代將軍九条頼経の鎌倉下向により、九条家から、三室戸僧正道慶や大進僧都觀基といった学侶が鎌倉に下向した。彼らは、將軍御所の仏教儀礼や將軍家の祈祷を執りおこなった。九条家ゆかりの学侶が鎌倉で勢力を伸ばす中で、鶴岡社務は鎌倉を護持する権門社寺を代表する存在として地位を維持した。一方、忠快の弟子良信は勝長寿院別当を延暦寺の法流が継承する役職とすることに成功したが、験者として活動する機会は減少した。永福寺別当以下の御願寺別当は、京都から下向した験者の勤める役職となっていた。

鎌倉の密教の主流が將軍御所に移ると、御所に出仕する験者は鎌倉の政局と無関係ではいられなくなった。九条家とのつながりで鎌倉に入った高僧は九条頼経が失脚した宮騒動で帰洛し、鶴岡社務定親は三浦泰村が自害した宝治合戦で縁坐を問われて帰洛した。宗尊親王の時代には親王の側近が御所で活動していた。鶴岡社務隆弁は正元の園城寺戒壇問題で上洛し、鎌倉の宗教社会が持つ実力を朝廷や延暦寺に誇示した。京都の権門寺院は、鎌倉で成長した人々の実力を認め、要職に就けなければならぬ状況になっていた。

## はじめに

本稿は、「中世都市鎌倉における密教の成立と展開」(『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』四四号 二〇一七年、以下「前稿」と省略)の続きとして、鎌倉中期の鎌倉に展開した密教を述べるものである。

本稿は、四代將軍九条頼経の鎌倉下向に始まる九条家ゆかりの学侶の鎌倉進出から論を始め、園城寺戒壇問題に鎌倉の宗教社会が初めて関わった正元の園城寺戒壇問題までの鎌倉の密教の変遷を論じていく。筆者は、この期間に起きた変化を三点に集約して考えている。

第一に、將軍家九条頼経の父道家が、將軍御所の儀礼を撰閑家の分家にふさわしいものとするため、多くの人材を鎌倉に派遣したことである。この人材の中には、將軍御所で行われる仏教儀礼を担当する学侶も含まれていた。彼らは、將軍御所の儀礼を整備するだけでなく、鎌倉の有力者の子弟を弟子として受入れ、育てていった。学侶たちは、道家の意図を越えて、鎌倉の武家社会に密教を広めていく役割をはたした。<sup>1)</sup>

第二に、真言密教広沢流の宏教が鎌倉に下向し、甘繩無量寿院を拠点に独自の判断で伝授を始めたことである。本来なら、本山に入って学ぶべき密教の教相・事相を、宏教とその弟子は鎌倉に進出した中世律宗や本山に上る機会の少ない東国の地方寺院の僧に伝えていった。<sup>2)</sup>

第三は、將軍家御願の社寺が地位低下を起こしたことである。鎌倉にある將軍家御願の社寺は、鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺・大慈寺・右大将家法華堂・五大堂明王院・久遠寿量院の七社寺と考えてよい。これらの別当は、將軍家や鎌倉幕府から依頼された修法・祈祷を取り仕切る力量を持つ高僧が勤めた。しかし、將軍御所に京下りの験者が集うようになると、將軍御所で行われる修法は験者が勤めるようになり、鶴岡八

幡宮は大規模な修法を受け持つようになった。この変化に対応するように、鶴岡社務と延暦寺が別当を継承する勝長寿院以外は、將軍御所に出仕する験者を別当に補任する寺院となっていた。

ここで述べた変化は、同事進行で進んでいくものなので、各章の課題に織り込んで叙述していく。

### 一 九条頼経時代の將軍御所

承久元年七月十九日、源実朝の跡を継いだ九条頼経が、行列を組んで鎌倉の街に入った。この行列には、頼経の護持僧大進僧都観基が連なっていた。<sup>③</sup>『尊卑分脈』は観基に対して寺門（以下、天台寺門流と記す）を示す「寺」の傍注を付すが、平雅行氏は『門葉記』や「皇代曆」の記事から観基の法流を山門（以下、天台山門流と記す）と推定した。<sup>④</sup>本稿はこの推定をうけ、観基を天台山門流として叙述していく。

観基の祖父源行頼・叔父信光は九条兼実の姉妹皇嘉門院の院司、叔父国行は九条兼実の政所職事、父国基は九条良通の政所匂当を勤めた。<sup>⑤</sup>観基は、九条家重代の諸大夫の家に生まれた子である。承久元年の鎌倉下向は、九条家の意向と推測してよいだろう。九条道家の命による鎌倉下向の事例には、撰関家の政所や文殿に祇候した明経道清原氏の清原教隆がいる。<sup>⑥</sup>観基は、貞永元年三月十五日に入滅するまで、鎌倉で頼経の護持僧を勤めた。<sup>⑦</sup>

九条家の出身で鎌倉に下向した最も高位の僧は、九条道家の弟で園城寺長吏・四条天皇護持僧を勤めた天台寺門流の三室戸僧正道慶で、永福寺別当を勤めた。<sup>⑧</sup>道慶と鎌倉の接点は、仁治元年十二月三十日に將軍九条頼経の推挙で大僧正に昇進したことである。<sup>⑨</sup>これは、曆仁元年四月に道慶が六波羅殿で將軍家御祈五壇法の導師を勤めたことに対する返礼と

思われる。道慶は、仁治二年十一月に四条天皇護持僧を良禪と交代した。<sup>⑩</sup>鎌倉下向はこの時以後で、寛元四年の宮騒動で九条頼経と共に帰洛するまで、おおよそ五年、鎌倉に滞在した。

この間、道慶は九条頼経の將軍御所や、嫡子頼嗣に將軍職を譲って移った大殿御所から依頼を受け、関東五壇法を行った。五壇法は、息災・増益・調伏を目的とし、不動明王以下五種の明王を供養する修法である。表一は『阿娑縛抄』・『門葉記』・「五壇法日記」（『統群書類従』）・『吾妻鏡』等に記録された関東五壇法の一覧である。天台系の史料が多く事例を残すので情報の偏りはあるが、『吾妻鏡』から真言系の事例を補うことができる。ただ、『吾妻鏡』には簡略な記述の条文もあるので、大壇・脇壇を勤めた僧侶の名を記すもののみ抽出した。

関東五壇法は、小河法印忠快が源実朝のために建保四年に行ったと記す『門葉記』の事例が初例である。源実朝の時代は忠快が鎌倉に滞在した時に行った一例のみで、九条頼経が鎌倉の九条家の主をつとめた時期に事例は集中する。

道慶が鎌倉で活動を始めた仁治三年は、鎌倉幕府が將軍九条頼経支持派と執権北条経時支持派の二派に分かれ、内訌が激化していた時期である。関東五壇法は、仁治三年から寛元四年の間に八回行われ、道慶はそのうち五回の導師を勤めた。残りの三回は、九条頼経が將軍職を嫡子頼嗣に譲る理由となった白虹貫日の天変消除を目的とした寛元二年の二回と、宮騒動の直前に行われた寛元四年四月二日の五壇法である。寛元二年に行われた天変消除御祈五壇法は、天台山門流の快雅が導師を勤めた。快雅は、九条兼実の弟天台座主慈円の高弟であり、<sup>⑪</sup>九条頼経の兄弟天台座主慈源の推挙で、延応元年八月二十八日に僧正に昇進した。<sup>⑫</sup>延暦寺青蓮院門跡を継承する九条家とのつながりから、快雅は寛元二年の五壇法

導師を勤めた。寛元四年の五壇法は、道慶の従兄弟にあたる本覚院僧正良禪が勤めた。<sup>13</sup> 仁治三年以後に行われた関東五壇法の導師は、九条家との接点を見いだせる人々が勤めていた。

寛元四年の宮騒動は、九条家が鎌倉に築いた勢力を瓦解させただけでなく、京都にいる九条道家をも失脚させることになった。四代執権北条経時の早世は九条頼経による調伏祈祷が原因であるとの風聞が流れ、父道家も孤立から失脚へと追い込まれたのである。九条家が北条経時を呪詛した事実は確認できないが、九条道家諷誦文には「あまつさへ、少僧関東謀叛の心をもしるらん、今度呪詛の同意も有らむ、又国位をあやふめて重事をはかるといふ讒口、耳にみり」と記されている。<sup>14</sup> 五壇法には息災法と調伏法の両様の作法があり、修法の次第がわからなければ、調伏法とは断定できない。<sup>15</sup> この時期の関東五壇法が『吾妻鏡』に記されないのは、意図的に書かなかった可能性を考えてよい。

寛元四年七月十一日、宮騒動に敗れたことで京都に戻る前將軍九条頼経上洛の行列が鎌倉を出立した。この行列には、「此外、三室戸僧正・宰相僧正以下高僧教輩、陰陽道輩少々同心帰洛」と、頼経と共に帰洛した僧侶を記している。三室戸僧正は道慶、平雅行氏は宰相僧正を岡崎僧正成源と比定する。<sup>17</sup> 成源は、寛元二年三月十一日、鎌倉の將軍御所で七条殿（頼経帰洛後の通称で記録）のために冥道供を修した。『門葉記』は、これを関東冥道供の初例とする。<sup>18</sup> 成源は、京都で延暦寺宝幢院検校・岡崎実乘院院主を勤め、鎌倉では久遠寿量院別当を勤めた天台山門流の高僧である。表二の年譜で整理したように、鎌倉で多くの祈祷に名を連ねているが、『吾妻鏡』はその一部しか記録しない。九条家とのつながりは、九条道家出家の唄師や二条良実結縁灌頂大阿闍梨をつとめ、青蓮院門跡を勤めた九条道家の叔父良快と行動を共にしていることから明らかである。

かである。九条頼経の御所では、道慶・快雅・良禪・成源といった九条家の人脈でたどれる高僧が活動していた。

## 二 將軍家護持僧の構成

次に、九条頼経の御所で整備された將軍家護持僧について述べる。『吾妻鏡』安貞元年十二月十三日条には、將軍御所に詰める護持僧の結番が記されている。護持僧は一月を上旬・中旬・下旬の三番に分け、それぞれの番に三人を置いた。番の筆頭には、天台山門流の勝長寿院別当良信、天台寺門流の験者信濃法印道禪、真言広沢流の鶴岡社務定豪の三人を置いた。九名のうち、七名は門流がわかる。天台山門流は、小河法印忠快の弟子勝長寿院別当良信、九条家が派遣した頼経の護持僧觀基、鶴岡林東坊供僧の頼暁である。天台寺門流は、承久の乱の時に世上無為の祈祷を行った道禪・円意である。<sup>19</sup> 道禪は神祇伯仲資王の猶子となって園城寺の定恵に入室した僧で、鎌倉での初見は承久三年の世上無為祈祷となる。仁治二年二月に上洛して園城寺別当に就任し、半年ほど在任した。<sup>20</sup> 円意は園城寺に隣接する如意寺を拠点とした僧で、初見は道禪と同じである。この二人が『吾妻鏡』にみえるのは九条頼経鎌倉下向以後で、二人とも九条家との接点は特に見いだせない。源家將軍と密接に結びついていた本覚院僧正公顕の法流が公暁の源実朝暗殺によって鎌倉とのつながりが崩れた後、新たに進出した法流と考えるとよい。円意とその後継者隆弁は共に如意寺を通称とし、鎌倉では幕府の有力者の子弟を弟子に迎え、園城寺と如意寺の興隆につくしていった。<sup>21</sup> 隆弁は、後に園城寺長吏と鶴岡社務を兼務して京都と鎌倉を往来しながら活動するようになった。この法流が、鎌倉の天台寺門流の本流となっていく。道禪の法流も、円審・上智と継承され、鎌倉で行われた密教の修法に名を連ねていた。天台寺

門流は、將軍御所に出仕する験者として活動することで、鶴岡社務を勤める真言広沢流の定豪の法流が全盛時代を築いた時期を繋いでいくことになる。

真言広沢流は、鶴岡社務を勤めた忍辱山流の定豪と大門寺を創建した弟子の定清である。この二人については、「前稿」第三章「真言密教の鎌倉進出」で、真言密教の教学を学んだ後に鎌倉に下向した学侶であること、鎌倉の事を託せる弟子として御家人後藤氏の子定清を育てたこと、定清は実家の支援を受けて鎌倉に大門寺を創建し、鎌倉の忍辱山流の拠点としたことを述べた。

將軍家の護持僧は、密教の山門・寺門・広沢の三勢力の均衡がとれた構成となっている。また、源家將軍時代からの継続として説明できる良信・頼暁・定豪・定清、九条家が鎌倉に派遣した観基、天台寺門流の中で勢力交代のあった円意・道禅など、鎌倉時代中期に起きた諸勢力の消長に対応した構成となっている。將軍家護持僧は、九条頼経の側近の政所別当藤原親実と、評定衆の二階堂行村・後藤基綱が担当となって編成したので、鎌倉幕府首脳部の意向を受けた人選とみてよい。

### 三 將軍家御願の寺院

次に、將軍家御願の寺院がたどった変化を述べてゆく。源家將軍家御願の寺院は、源頼朝が源家と鎌倉を守護する総合的な社寺として修造した鶴岡八幡宮、父義朝を供養するために創建した勝長寿院、奥州藤原氏や源義経の鎮魂のために創建した永福寺、源実朝が君徳父恩に報いるために創建した大慈寺、源頼朝の持仏堂から供養堂を経て別当を置く寺院に格上げされた右大将家法華堂が知られている。<sup>22)</sup>

前稿で述べたように、源頼朝の時代はまだ、護国の修法に関する知識

や技術は、京都の権門寺院が独占的に保持しているため、鎌倉には密教の修法を取り仕切る知識や技術を伝授された学侶が少なかった。そのため、重要な法会は、園城寺の本覚院僧正公顕や延暦寺の小河法印忠快に依頼し、鎌倉に下向して導師を勤めてもらっていた。

#### (1) 五大堂明王院

九条頼経が將軍家を継ぐと、五大堂明王院と久遠寿量院が新たに創建された。明王院は、寛喜三年十月六日に九条頼経の発願によって建立の沙汰が始まり、嘉禎元年六月二十九日に鶴岡社務定豪が導師となって落慶供養が行われた。創建時の別当は、前鶴岡社務定豪である。<sup>23)</sup> 五大堂で供養する五大明王は不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の五種であり、五壇法で供養する五尊と同じである。五壇法は、密教の修法では不動法の一つとして分類される。

九条頼経が関東五壇法を盛んに催したのと、五大堂明王院の創建は無関係ではないであろう。寛元四年の宮騷動以後、明王院の中核が五大堂から北斗堂に移っていく。頼経の失脚によって五壇法を発願する人がいなくなつたのが大きな要因であるが、北条氏にとっては北条経時呪殺という衝撃的な事件で用いられた修法であり、避けられた可能性が高い。実質的には五大尊を祀る作法であるが、「五大尊合行護摩」<sup>24)</sup>など様式を変えて実施していたと推測される。五壇法を行わないことは、五大堂の衰微を意味する。明王院が五壇法に変わるものとして中核に据えたのが星宿法である。『吾妻鏡』仁治元年九月七日条には「仏師參河法橋、依召參御持仏堂、奉造始北斗七星・廿八宿・七曜・十二宮等形像」と北斗堂に供養する諸尊造像が記している。星宿法は天変消除や延命を祈願して行う修法として実施する機会が多いので頼経の時代に建立されていた

が、頼経失脚後の明王院は北斗堂を中核に再編成されたのであろう。

明王院別当は、定豪が創建時に在任した後、在任者がわからない時期が長く続く。定豪の次に確認できるのは、宗尊親王の護持僧で碩徳と『吾妻鏡』に記された真言広沢流の厳恵である。<sup>(25)</sup> 厳恵は九条高実の子で、宮騒動で帰洛した良禅の甥にあたる。師の厳海は明王院の落慶供養に参列しているので、鎌倉とのつながりは重代となる。厳恵は、宗尊親王が鎌倉に下向した建長四年から宗尊親王の帰洛で遁世する文永二年まで、將軍御所で験者や護持僧を務めた。明王院別当は、鎌倉滞在のために給わった役職と考えられる。厳恵は、將軍御所で護持僧として活動し、明王院北斗堂で天変消除の修法を行いと、將軍家を護る修法や祈祷を行っていた。

## (2) 久遠寿量院

久遠寿量院は、將軍九条頼経が將軍御所に建立した持仏堂が始まりで、寛元二年には久遠寿量院の名でよばれていた。<sup>(26)</sup> 歴代を整理した別当次第が残されているが、南北朝時代に訴訟を目的として編纂されたもので、鎌倉時代の史料と適合しないところがある。<sup>(27)</sup>

初代岡崎僧正成源は九条頼経の側近で、將軍家持仏堂を管理するのにふさわしい高僧であるが、『吾妻鏡』の初見は暦仁元年正月二十八日条である。この年は二代定豪の没年にあたるので、訴訟文書で房玄が主張した成源・定豪・定親・教雅の相伝は無理がある。成源は寛元四年の宮騒動で九条頼経と共に帰洛するので、この時まで在任したとみてよいだろう。その後任に、鶴岡社務定親が補任されたとみるのが自然である。定親も翌宝治元年の宝治合戦で三浦氏縁坐を問われて帰洛するので、在任は足かけ二年である。定親の後、久遠寿量院別当職は厳恵・良瑜・教

雅と広沢流が相伝したとする。厳恵の鎌倉下向は建長四年なので、宝治元年から建長四年にいたる五年間の別当が不明となる。久遠寿量院別当職には、九条頼経と成源、宗尊親王と厳恵というように將軍家の信頼を得た高僧が補任された。將軍家持仏堂という成立の事情から、將軍家の意向を受けた補任が行われたと考えるべき。

## (3) 右大將家法華堂

右大將家法華堂は源頼朝の持仏堂として建立された御堂で、頼朝の薨去によって供養を目的とした法華堂に改めた。正治二年正月十三日に行われた頼朝一周忌供養が初見である。当初は、鶴岡社務円暁の鎌倉下向に同道したと推測される大学房行慈が別当を勤めた。<sup>(28)</sup> 『吾妻鏡』寛喜三年十一月十八日条は、寛喜三年の鎌倉大火によって焼失した法華堂の上棟供養を、「寺家」に依頼したと記している。当時の別当は源範頼の末裔尊範で、『三井寺灌頂脉譜』は尊範を行慈入室・公縁灌頂の弟子と伝える。行慈に附いて鎌倉で学び、伝法灌頂を受けるために本山に上って、源頼朝と親しく接した本覚院僧正公顕の孫弟子にあたる公縁から伝法灌頂を受けたと考えるべきだろう。右大將家法華堂は、源家將軍とつながりのある僧を別当に補任した。尊範の後には北条氏ゆかりの学侶が勤めたので、京下りの高僧が鎌倉滞在中に勤める役職とはならなかった。

## (4) 鶴岡社務

次に、源家將軍の時代に成立した御願社寺の変化をみてみよう。鶴岡社務は、天台寺門流の慶幸が公暁による源実朝暗殺一件の後始末をした後、真言広沢忍辱山流の定豪が勝長寿院別当から転任した。以後、定豪の弟子定雅・定親と定豪の法流が社務を継承した。この経緯は「前

稿」第三章「真言密教の鎌倉進出」で述べている。

(5) 勝長寿院

勝長寿院別当は、定豪が承久二年に鶴岡社務に転任した後、天台寺門流の内大臣僧都親慶が補任された<sup>(29)</sup>。広沢流と寺門流との間で役職を入れ替えた人事である。親慶は、勝長寿院別当補任が『吾妻鏡』の初出となる。天台寺門流は公暁の一件で鎌倉住の学侶が少なくなつたので、親慶は勝長寿院別当に就任するために鎌倉下向をした可能性がある。親慶は、元仁元年七月二十四日に五十六歳で亡くなつた<sup>(30)</sup>。

親慶の没後、天台山門流の大藏卿法印良信が八月八日に勝長寿院別当に補任された。良信は、小川法印忠快の弟子で、『阿婆娑抄』「山門真言三流事」は良信が忠快の遺跡をめぐる相続争いで撰閑家出身の承澄に敗れ、忠快の本坊小川殿を承澄が継承することになった。失意の良信が入宋を志して鎮西に下つていたところを、九条頼経が鎌倉に招請したと伝える。九条頼経は、鎌倉に入る良信に対する処遇として、空席となつた勝長寿院別当を用意したと考えられる。良信は建長五年五月二十三日に亡くなる直前まで、この役職を勤めた。同年五月十六日、良信の弟子で、源家一門の足利義氏の子最信が別当に補任された<sup>(31)</sup>。この讓任以後、勝長寿院別当は天台山門流によつて継承されていった。

(6) 永福寺

永福寺別当は、五味文彦研究代表『吾妻鏡と中世都市鎌倉の多角的研究 研究成果報告書』(課題番号一五三二〇〇八一、二〇〇六年)に「永福寺別当次第」が翻刻されている。この記録は他の資料と対比すると実態と合わないところがあるので、整理しながら述べていきたい。初代の

恵眼房阿闍梨性我は、創建の年である建久三年に補任されたと考えて問題は無い。その後、性我は正治元年六月二日に勝長寿院別当を辞して神護寺に帰寺した<sup>(32)</sup>。性我が永福寺別当から勝長寿院別当に転任したのか、両寺を兼務したのかは明確でなく、永福寺別当退任の時期は明確ではない。経玄は永福寺別当在任中の建保元年九月二十八日に入滅したので、慶幸とは順番が逆になる<sup>(33)</sup>。慶幸は、『吾妻鏡』承久元年三月一日条に永福寺別当から鶴岡社務に転任したことが記されているので、経玄死去の後任として別当に補任され、鶴岡社務に転任するまでの期間勤めたと考ええてよいだろう。慶幸の後任は、同じ条文に「圓如房阿闍梨遍曜補永福寺別当」と記されている。この条文が遍曜の終出なので、退任の時期は明らかでない。

遍曜の後には、鶴岡慈月坊供僧行勇が『吾妻鏡』仁治元年六月九日条に永福寺別当として見えるまで在任者がわからない。この条文は、勝長寿院別当良信に依頼した祈雨祈禱の効験が現れないので、改めて永福寺別当の行勇に依頼したという内容である。永福寺別当は、勝長寿院別当との対比として書かれている。行勇は栄西から臨濟禪を学んだ後継者として退耕行勇の名でよく語られるが、鎌倉幕府の祈禱を行う時は官僧である<sup>(34)</sup>。「鶴岡八幡宮寺諸職次第」は、行勇の法流を「栄西入室」と記すので、天台密教葉上流を学んだ天台僧として補任している。行勇は、仁治二年七月十五日に七十五歳で入滅した<sup>(35)</sup>。

行勇の後任は、九条良輔の子で小野安祥寺流の良瑜である。良瑜は、九条兼実の妻八条院三位局の孫で、八条院の養子であった。その縁で、母方の叔父真言広沢流の安井門跡道尊のもとに入室し、道尊の推挙で官僧として昇進した<sup>(36)</sup>。その後、小野安祥寺流の成嚴から伝法灌頂を受け、安祥寺流の嫡流となつた。鎌倉での初見は、天変御祈不空絹索護摩を修

した貞永元年十月十七日である<sup>(37)</sup>。良瑜は、仁治二年に入滅した行勇の後任と考えてよいだろう。良瑜の在任期間は短く、仁治三年頃に鎌倉に下向した従兄弟の道慶と交代したと思われる。永福寺は天台真言弘通の寺院なので、法流の交代は特に問題ない。永福寺が通称として用いるに足る格付けを持つ寺院であれば、鶴岡社務のように社寺名を通称としたであろう。しかし、永福寺別当を勤めた高僧は、他の通称を用いた。永福寺別当は、験者として鎌倉に滞在した学侶が給わった役職と考えてよいのであろう。

#### (7) 大慈寺

大慈寺は、源実朝の発願で君恩父徳に報いるために創建した寺院である。源実朝は落慶供養の導師を京都から招こうとしたが、北条義時以下の重臣は「勝長寿院已下伽藍供養之日、被請三井寺醍醐碩徳之時、往還之間、多以万民之煩也、頗非作善本意、於今者、被用関東止住僧侶之条、可為一徳政之由、頻以申之」と、多大な経費がかかることを理由に反対した。この議論を経て、大慈寺供養導師は葉上僧正采西に依頼された。創建時の議論が影響したのであろうか、大慈寺別当は「鶴岡八幡宮寺諸職次第」に記された行勇以外に名前が現れてこない。大慈寺別当は、永福寺別当以上に通称として用いられない役職であった。

将軍家御願の社寺は、鶴岡八幡宮のみ別格として存在感を高めていくが、他の寺院は地位を低下させていく。勝長寿院は、九条頼経が招いた良信以後は天台山門流が別当職を継承する延暦寺の末寺化が進んだ。永福寺・大慈寺は、天台真言弘通の寺院として将軍御所で活動する験者が別当を勤めた。右大将家法華堂は源頼朝供養という明確な個性があり、頼朝にゆかりのある人物が補任された。九条頼経創建の五大堂明王院は、

頼経が鎌倉の主として振る舞った時期は五大堂の運営を任せられる鎌倉在住の高僧を補任したが、頼経失脚後は北斗堂を中心とした寺院に性格を変え、将軍御所に出仕する験者を別当に補任するようになった。久遠寿量院は、将軍家持仏堂という性格から将軍側近の高僧が補任された。鎌倉中期になると、将軍御所に出仕する験者が強い影響力を持つようになり、鶴岡八幡宮・勝長寿院・右大将家法華堂など特別な性格を持つ社寺以外は、験者が別当を勤める寺院になっていた。

#### 四 宏教・能禅による西院流の鎌倉進出

真言広沢流西院流の宏教や能禅は、鎌倉で多くの人々に西院流をはじめとした真言密教を伝授した。彼らは、忍辱山流の鶴岡社務定豪とその弟子たちのように鎌倉幕府の中核と向かい合う志向性を持たず、地方寺院の僧や鎌倉に進出した律僧に伝授をした。中世律宗は、顕密仏教の枠組みに入る南都仏教の律宗の名義を使いつつ、中国宋代の律宗を移入した改革派で、遁世僧の集団を形成した兼修する密教として、真言密教を選んだ。宏教や能禅は、鎌倉で真言密教と中世律宗をつなぐ役割をつとめた。

宏教は、文章道博士家のひとつ藤原式家の式部少輔藤原敦経の子として誕生した。ただし、敦経は宏教がまだ七歳の建久元年に亡くなった<sup>(38)</sup>。宏教が入室した心覚は園城寺の有職の僧だったが、真言宗に移り、高野山に入った。心覚とその弟子顕覚は、高野山で活動する本流から外れた僧であった。宏教は高野山で広沢流の教学を学ぶことはできたが、朝廷の公請によって行う護国の修法に参加する機会はなく、事相を実践する機会はなかった。『血脉類集記』は、建永二年に仁和寺慈尊院で香隆寺法印最寛から伝法灌頂の重受を受けたと記している。宏教は、最寛の弟

子となることで、仁和寺が行う事相を学ぶ機会を得た。宏教が最寛のもとで多くの聖教を書写したことは、『称名寺聖教』から知ることができ<sup>(40)</sup>る。

宏教が甘繩無量寿院を鎌倉の拠点にしたことは、「野沢血脈抄」(『真言宗全書』)に記された「住関東無量寿院」から知ることができる。鎌倉下向の時期は、嘉禎三年に仁和寺大悲院で厳遍に伝法灌頂を行った後、寛元元年に鎌倉大門寺で定清に両部印可を重授する前である。寛元元年には、將軍九条頼経の推挙で権律師に補任された<sup>(41)</sup>。鎌倉には宏教の下向を歓迎する人々がいたこと、その中心に大門寺別当定清がいたことは考えてよいだろう。定清は、定豪入滅後の鎌倉の忍辱山流を主導した人物であり、鎌倉幕府評定衆後藤氏の一族として幕府の中樞部とも接点を持っていた<sup>(42)</sup>。宏教が甘繩無量寿院に拠点を移したのは、後藤氏が寛元四年の宮騒動で九条頼経の与党として失脚し、六波羅評定衆を勤める家として拠点を京都に移したことが関係するであろう。

甘繩無量寿院に移った後、宏教は無量寿院を伝法灌頂の道場として使った<sup>(43)</sup>。宏教は、鎌倉で多くの人に広沢流の伝授を行ったが、公的な場には出席しなかった。権律師を辞任して学侶の枠組みから外には出なかったが、密教僧の責務である護国祈禱の勤仕は行わなかった。

能禅は東寺大悲心院の住僧であったが、宏教の弟子になって鎌倉に移り、甘繩無量寿院に「顕密聖教凡百二拾余合」を寄進したと伝える。能禅は、後に称名寺となる六浦津の北条実時堂廊で弁誓に伝法灌頂を行った<sup>(44)</sup>。能禅は、弘安九年四月十三日に甘繩無量寿院長老を務める律僧法爾房寛仁に伝法灌頂を行った。他にも、乗宝・性恵・浄舜・心了・聖禅・明実といった律僧が血脈に列記されている<sup>(45)</sup>。能禅が、西院流を律宗に広めていく橋渡しを勤めた人物である。

## 五 宮騒動・宝治合戦後の鎌倉の密教

鎌倉幕府は、寛元四年の宮騒動、翌宝治元年の宝治合戦を経て、執権北条時頼が主導する安定した時代に入っていた。鎌倉の密教は、宮騒動で九条頼経を支持した園城寺前長吏道慶以下の九条家ゆかりの高僧が帰洛し、宝治合戦で鶴岡社務定親が三浦泰村の義兄であることから解任されて帰洛した。この空白を埋めるべく、宗尊親王御所には後嵯峨院の意向を受けた人々が鎌倉に下向した。この時期、鎌倉の密教の勢力分野は大きく塗り替えられることになった。

### (1) 鶴岡社務の交替

鶴岡社務定親と三浦泰村の関係について、『吾妻鏡』宝治元年六月十四日条は「泰村後家者、鶴岡別当法印定親妹也」と記している。定親は籠居が命じられ、鶴岡社務が天台寺門流の隆弁に決まると帰洛した。京都に戻った定親は、村上源氏が創建した仁和寺尊寿院の院主職を兄弟弟子定清から譲りうけ、修造した後に院主として入った。東寺長者は仁治三年十二月二十九日に補任されたままであり、京都での地位に揺らぎはなかった。建長五年八月十六日には権僧正昇進、正嘉二年十一月十七日には僧正昇進と、鎌倉の政変の影響を受けることなく昇進した<sup>(46)</sup>。

鶴岡社務となった隆弁は、如意寺を継承する天台寺門流の僧で、定親が社務を勤めていた時期は験者として將軍御所で活躍した<sup>(47)</sup>。

定親の退任により、鶴岡二十五坊の供僧に入れ替えが起きている。鶴岡圓乗坊の圓性は、宝治合戦後に「依為弟子令随逐、同上洛」(鶴岡八幡宮寺諸職次第)と定親と共に上洛した。圓性の他にも、真智坊宣親、仏乗坊道範、永乗坊良舜が上洛した。その後任は、隆弁の意向によって

補任された。仏乗坊に勝恵、永乗坊に弁鎮と天台寺門流を補任し、日光山とつながりの深い真智坊には隆弁の縁者である天台山門流の弁祐、圓乗坊には圓性の弟性盛を補任した。<sup>(48)</sup> 鶴岡二十五坊の供僧職は、辞める僧が讓状を作成して後任を指名できるが、鶴岡社務の補任状によって任命が確定する。隆弁による補任が終わった時、鶴岡二十五坊の寺門僧は善勝坊重營、安樂坊宗慶、座心坊圓昌、千南房慶印、文恵坊慈性、静慮坊実祐、悉覚坊仲尊、南蔵坊良意、慈月坊慈弁、蓮華坊圓定、寂靜坊信豪、慈光坊慈暁、淨蓮坊道弁、仏乗坊勝恵、永乗坊弁鎮と十五人になっていた。隆弁の社務就任で、寺門流が鶴岡八幡宮で圧倒的な力を持ったことは明らかであった。

## (2) 勝長寿院と日光山犬懸谷坊

勝長寿院は、九条頼経が鎮西から招請して補任した大藏卿法印良信がそのまま別当職を勤めていた。良信は建長五年に入滅し、<sup>(49)</sup> 弟子として育てた源家一門の足利義氏の子最信が後任に就任した。以後、天台山門流が別当職を継承するようになった。

一方で新たな動きがあり、宝治合戦で三浦泰村と共に自害した関政泰の一族性弁が衆徒の訴訟で建長五年に日光山別当職を解任され、京都から本覚院法印尊家が別当として鎌倉犬懸谷の坊に入った。尊家は鎌倉に常駐し、験者として將軍御所で活躍した。<sup>(50)</sup> 尊家以後、日光山別当は犬懸谷坊を拠点として將軍御所に出仕し、験者として活躍した。

## (3) 永福寺

永福寺別当は、宮騒動で天台寺門流の三室戸僧正道慶が帰洛した後、後任の別当がわからなくなる。「永福寺別当次第」が後任と記す了心が

傍注に「般若房法印」とあり、天台密教葉上流の般若房律師了心が該当すると思われる。『吾妻鏡』建長二年九月十八日条に記された久遠寿量院一日千巻觀音經供養の導師「般若房律師率門弟等奉仕之」が、了心である。『元亨釈書』は、宝治元年に蘭溪道隆が鎌倉に入った時、了心が寿福寺でこれを出迎えたと伝える。<sup>(51)</sup> 了心は、鎌倉に居る栄西の門徒を束ねる立場にあり、天台密教葉上流と臨濟禪を兼修する栄西の禪密兼修の立場をとった。了心は東大寺大勧進職を勤めていたことから、『経俊卿記』正嘉元年七月十七日条に入滅を伝える記事がある。

了心の後、真言密教の小野・広沢を重受した松殿法印良基が永福寺別当に就任したと「永福寺別当次第」は伝える。『吾妻鏡』にみえる良基の初見は、宝治元年三月二十八日条の松殿法眼である。<sup>(52)</sup> 『吾妻鏡』の初出となる將軍家御祈不動尊并慈恵大師一万体摺写供養導師以後、修法・加持祈祷の導師を勤める験者として活動した。良基は撰関家の分家松殿を通称とし、永福寺別当を通称としなかった。『吾妻鏡』文応元年八月八日条は、將軍宗尊親王の御惱により七人の碩徳に七座法を修させたと記す。そこには、安祥寺僧正良瑜・松殿法印良基・勝長寿院法印最信・左大臣法印嚴恵の四人が記され、以下三人が略されている。良瑜以外は『吾妻鏡』の初出を宮騒動以後とする人々で、宗尊親王時代の將軍御所で重きをなした人々を伝える条文である。良基は文永三年六月二十日に鎌倉を逐電した。<sup>(53)</sup> この日は、北条時宗・実時以下の得宗家中枢の人々が深秘の沙汰として寄合を開いていた。良基が將軍家御息所近衛宰子と密通したという風聞が、宗尊親王上洛を正当化する理由のひとつとして語られている。風聞の真偽はともかく、良基が宗尊親王の側近であったことは認めてよいのであろう。

永福寺別当は、宮騒動で帰洛した天台寺門流の三室戸僧正道慶、禪密

兼修の立場をとる天台山門流の了心、真言密教の良基と門流に関係なく、密教僧が補任された。了心は禅の専修を主張する円爾弁円から浅学と批判されたが、天台密教と禅を兼修し、天台密教の僧として鎌倉幕府から依頼された修法を勤めた。これは、栄西の門流が鎌倉幕府との接点を維持していくために必要なことであつた。永福寺は密教の学侶を別当に補任する天台・真言弘通の寺院であり、鎌倉幕府のために修法・加持祈祷を依頼されると勤めていた。

#### (4) 大慈寺別当

大慈寺別当を誰が勤めたかを伝える史料は、ほとんどない。正嘉元年八月二十一日、大慈寺修造の落慶供養導師を籤引きで選ぶことを定めた。対象は、三位僧正頼兼(寺門)・安祥寺僧正良瑜(真言)・鶴岡社務隆弁(寺門)・松殿法印良基(真言)・左大臣法印厳恵(真言)・本覚院法印尊家(山門)であつた。ここに名を連ねたのは、鎌倉に居る験者である。隆弁は鶴岡社務を通称としたが、永福寺別当良基も明王院別当厳恵も寺院名を通称としない。大慈寺別当の名前がわからない大きな理由が、ここにあるといえる。

#### (5) 右大将家法華堂

右大将家法華堂は、吉見僧都尊範が別当を引き続き勤めていた。尊範は、源家一門源範頼の末裔で、本覚院僧正公縁から園城寺唐院で建長二年十一月二十一日に伝法灌頂を受けた<sup>(55)</sup>。尊範は密教の修法を行うことはできたが、『吾妻鏡』は宗尊親王の夢想によつて密々に不動護摩を修した一例のみを伝える<sup>(56)</sup>。尊範の後任として就任する名越朝時の猶子公朝の代から、右大将家法華堂別当は修法の脇壇阿闍梨などに名を連ねるよう

になる。

#### (6) 久遠寿量院

久遠寿量院別当は、寛元四年の宮騒動で岡崎僧正成源が帰洛し、翌宝治元年には、宝治合戦で兼任していた鶴岡社務定親が帰洛した。定親の次に名前がみえるのは、宗尊親王の時代に碩徳と崇められた真言広沢流の左大臣法印厳恵で、『吾妻鏡』は験者と記すのみである。久遠寿量院別当は、『血脈類集記』の傍注にみえる。厳恵の後任安祥寺僧正良瑜も、九条家の出身である。九条頼経ゆかりの寺院なので、九条家とつながりのある験者を別当に補任したのであろう。良瑜もまた、『吾妻鏡』には宗尊親王時代の碩徳の験者として記され、永福寺別当のことは「永福寺別当次第」、久遠寿量院別当のことは『血脈類集記』に見える。厳恵も良瑜も將軍家を護持するために御所に居るのが本務で、將軍家御願寺の別当は鎌倉に滞在するための役職として勤めたのであろう。

鎌倉を守護するために修法を取り行う鶴岡社務と、天台山門流が継承する勝長寿院以外の將軍家御願寺別当は、將軍御所に出仕して將軍家を護持する験者が鎌倉で活動する間の経費を支給するための役職となつた。

#### 六 正元の園城寺戒壇問題

園城寺戒壇問題は、天台宗僧徒が授戒を行う場所として延暦寺に創建した円頓戒壇院を独占的に使用する延暦寺と、延暦寺と袂を分かつたがゆえに天台の戒壇院で授戒できない園城寺の対立である。平安時代の長暦三年からこの問題をめぐって両寺は衝突を繰り返して、園城寺が戒壇院設立の勅許を求めてくるたびに、両寺の間に入って調停をしなければ

ならない朝廷は苦しい立場に立たされた<sup>(57)</sup>。延暦寺で授戒できない園城寺の僧徒は、三戒壇のひとつ東大寺戒壇院や、門流の沙汰として園城寺の三院五別所及び如意寺で授戒を行っていた。園城寺の悲願ともいえるべきこの問題に鎌倉が初めて関わり、京都の権門寺院に鎌倉の実力を示したのが正元の園城寺戒壇問題である。

正元の園城寺戒壇問題は、朝廷の担当者としてこの事件に関わった花山院師継の日記「妙槐記」(『史料大成』)や延暦寺の動きを詳細に記した「天台座主記」(『続群書類従』)によって、時系列にそつた理解をすることが出来る。鎌倉側の動きは、園城寺に入った鶴岡社務隆弁と三位僧正頼兼、六波羅探題、園城寺の使者の報告が『吾妻鏡』に記録されている。これらの情報から、正元の園城寺戒壇問題に鎌倉がどのように関わったかを述べていく。<sup>(58)</sup>

初めに、「妙槐記」と「天台座主記」から重要な部分を引用しよう。

「妙槐記抄 宣旨案」正元二年正月四日条

正元二年正月四日、(中略)、高俊云、有宣下事、仍著直衣<sup>卒爾之間不及下袴</sup>

出逢、高俊来予前、自懷中出口宣一枚授之、予披見之処、園城寺三

摩耶戒事也、為天下之重事、長曆已来、園城寺衆徒可立戒壇之由訴

申、不然者、以三摩耶戒、可定法臈之由所望申也、而度々及群議、

依山門衆徒之支申、無裁許、去々年、園城寺奉奏上申此両条、未及

評定之処、山門衆徒聞此事蜂起、忽奉動神輿抛内裏、依此事、寺門

訴訟永被停止、仍衆徒等退散、園城寺仏法已以魔滅、去年天下飢饉

疫病相加、京中死骨滿充、道路難通、智証大師記文已以符号、天下

有識多所恐、園城寺衆徒等雖隱山林、触之関東、円満院宮令隠居西

山給、凡寺門僧不随公請、及去年窮冬、自関東武士数百人入洛、不

知其故、円満院宮出西山、令坐坊城給、道俗成疑、今日已三摩耶戒

事宣下、希代之事也、(中略)、高俊云、宣旨到来者、忿成官符、今夜中可進円満院宮之由、有御気色、仍、以書状、内々仰彼家了云々、抑、口宣並下知弁之状、如此、

正元二年正月四日 宣旨、

園城寺沙弥三摩耶戒、

宣令定法臈、

藏人勘解由次官藤原高俊奉

予下弁状、

口宣一枚、

右早可令下知給之状如件、

正月四日 権大納言師継

左中弁殿

内々申、此事為重事之間、并可下誰人哉之由、内々伺申之

処、可奉下御辺之由被仰下候也、今夜不廻時刻、可有下知

之由、職事来仰候、可令存其旨給、

「天台座主記」第八十二 無旨尊助親王

同二年正月四日、園城寺望申戒壇事被下 官符、

左弁官下 園城寺

应当寺沙弥以三摩耶戒令定法臈事

右、権大納言藤原朝臣師継宣奉 勅、園城寺沙弥以三摩弥戒宣

令定法臈者、寺宜承知、依宣行之、

正元二年正月四日

大史小槻宿禰<sup>在判有家</sup>

中弁藤原朝臣<sup>在判光国</sup>

園城寺戒壇問題における延暦寺の対応は、はじめに朝廷に反論として訴状を提出して園城寺の申請について差し止めを求め、対応が十分で

ない場合、朝廷に対して嗾訴を起すか、園城寺に焼討ちをかける強硬手段に出た。この事件に鎌倉が巻き込まれた発端を、「三井統灯記」巻第九「当寺年表 上」は「(正嘉二年)九月、観勇・経幸・勤尊・慶俊等、訴戒壇興行於関東」と記録している。園城寺が戒壇問題で鎌倉に助力を求めた最初の事例となる。

京都では、円満院宮仁助法親王が洛中に構えた坊城殿を引き払って、西山に隠れた。他の僧綱もこれに同調し、朝廷が催す修法への参加を断つて山林に隠れた。園城寺は、正元元年の飢饉を何もしいない朝廷に対する天譴と批判したが、朝廷は延暦寺を警戒して動かなかった。ここまでは、今まで通りの朝廷・延暦寺・園城寺の三者の問題として展開した。

正元の園城寺戒壇問題では、鎌倉に園城寺の如意寺を預かる鶴岡社務隆弁がいた。『吾妻鏡』には、隆弁の報告が載せられている。

『吾妻鏡』文応元年三月一日条

一日戊辰、若宮別当僧正<sup>隆弁</sup>、自京都帰参、是依園城寺三摩耶戒壇事、去年九月十四日上洛、今年正月四日就令奏達之勅許、而山徒及強訴之間、同廿日召返官符、同廿一日寺門衆徒僧正仙朝・法印淨有・

忠尊以下僧綱三十餘輩、集会金堂、凝僉議、同廿三日退散云々、

この報告で、隆弁は正元元年九月十四日に鎌倉を出立したと伝える。これに対応する記事が『民経記』正元元年十一月二日条で、「三井隆弁・頼兼両僧正去比自関東上洛、是依召之故云々、三井僧侶可帰住之由、可致沙汰之故云々、其内猶有子細歟、重遣飛脚於関東、随彼左右可帰下云々」と記されている。円助法親王の抵抗を支持して公請に従わず、京都を離れた人々を呼び返すために、朝廷は園城寺の官僧に対して帰住を命じた。ところが、その命令は鎌倉に滞在する人々にも適用されたので、隆弁・頼兼といった鎌倉住の高僧も本山に戻るようになった。鎌倉の

人々は、園城寺の使者から園城寺が戒壇設立勅許を申請したことを知らされていたので、この上洛が危険なものであることは承知していた。朝廷は、隆弁・頼兼の入寺まで鎌倉が園城寺戒壇問題に関与してくるとは考えていなかった。武士数百人が関東から入洛したという情報に警戒を強めている。延暦寺の嗾訴は予想される脅威であっても、数百人の武士を伴って上洛した隆弁・頼兼の動きは不気味であった。この圧力により、朝廷の対応が変わり始めた。『吾妻鏡』には、幕府が園城寺を支援するために軍勢を上洛させたという記録はない。考えられることは、隆弁・頼兼の弟子がそれぞれに実家が付けた武者を引き連れて上洛に同行したことであろう。六波羅探題も、鶴岡社務が本山に入って延暦寺に抵抗する姿勢を示しているのであれば、隆弁以下の鎌倉から上洛した僧侶を見殺しにはできない。藤原経光が鎌倉から上洛してきた僧侶を帰さなければいけないと考えたのは、朝廷からみても鎌倉住の高僧が無視できない存在になっていたことを示している。

朝廷は、園城寺の要求を二点に整理し、対応を考えた。延暦寺や園城寺が作成する文書と違い、教義と先例の応酬がないので、争点が整理されている。園城寺の第一の要求は、延暦寺が天台宗の戒壇を独占しているため、園城寺にも戒壇設立を認めてほしいというものである。第二の要求は三摩耶戒壇の設立を認め、三摩耶戒授戒をもって法牒を数えて欲しいというものである。第一の要求は、延暦寺は自らを天台宗を取りまとめる立場にあると考えているので、園城寺が延暦寺から分離することを認めない立場をとる。それ故、朝廷も延暦寺が認めないことを承知している。一方で、朝廷は自らの判断が鎌倉を巻き込む結果を招いたので、園城寺に好意的な鎌倉への配慮から、園城寺の主張を全否定することとは難しい。第二の要求を受け入れて公文書を作成することは、苦渋の

選択といえる。

これに対する延暦寺の対応は早かった。「天台座主記」は、その日のうちに大衆が蜂起し、七社神輿を根本中堂に集結させたと記す。翌正月五日、残りの神輿二基が到着して全て揃うと、冷泉富小路御所を目指して神輿を振りかざした嗷訴を行った。嗷訴の行列は、途中で六波羅探題が洛中警固のために配置した軍勢に阻まれて御所にたどり着けなかった。路頭に神輿を棄てて退いた。朝廷は、この神輿をどうするか、後始末という難題を押しつけられた。この嗷訴の後、朝廷は延暦寺を宥める方向で事件の決着をつけるべく、正月十九日には園城寺に出した三摩耶戒壇勅許の官符を召し返す官宣旨を発給した。正元の園城寺戒壇問題は、それまで延暦寺・園城寺・朝廷の三者間のやりとりで展開してきた問題に、鎌倉という新たな要素が加わったことを示した。園城寺からみた場合、初めて戒壇設立を認める勅許が下された先例をつくった大きな前進であった。

京都から見ると、鎌倉を象徴する存在は鶴岡社務隆弁である。文永四年、隆弁は鶴岡社務に在任しながら、園城寺長吏に拝任した。隆弁は園城寺の興隆につくすだけでなく、自らも園城寺に宝昭院を創建した。隆弁をはじめ、鎌倉に下向した寺門僧は武家の子弟を弟子に迎えたので、隆弁の如意寺のように、少数ではあっても武力において侮れない院家が現れてきた。「五代帝王物語」<sup>59</sup>には、文永の園城寺戒壇問題の記述の中に次のような一文がある。

さるほどに、三井寺には、同（文永元年）四月に召し返されたる三摩耶戒ををして行て、戒壇を立ると聞えしかば、五月二日、山門の衆徒寄かけて合戦、つるに寺を焼払ふ、次の日又よせて、別所々々をせめおとす、如意寺ばかりぞおとされざりける、

如意寺は、鶴岡社務隆弁が円意から継承した園城寺の五別所に相当する別院で、隆弁は鎌倉で育てた弟子の伝法灌頂をここで行った。如意寺は延暦寺と尾根続きでつながる如意ヶ嶽に建てられた園城寺側の要衝で、城塞にも適した場所に建てられている。この防御に適した要地に円意・隆弁に弟子入りした武家の子弟と合戦に長けた法体の従者が集まっているので、延暦寺の大衆も攻めあぐねる場所となった。文永元年の園城寺戒壇問題で、延暦寺は園城寺全山の焼討ちを考えていた。その中で、園城寺別当を兼務している隆弁が院主を務める如意寺だけが延暦寺大衆を退けた。この事件は、朝廷にも延暦寺の大衆にも、隆弁が侮りがたい存在であることを示すことになった。

おわりに

本稿は、鎌倉時代中期の鎌倉の密教の展開を論じたものである。九条頼経の鎌倉下向は、鶴岡社務公暁の將軍源実朝暗殺によって混乱する鎌倉の密教世界に変化の新しい方向を示した。大進僧都観基の鎌倉下向に始まる九条家の鎌倉進出である。

九条家は、鎌倉の將軍家を撰閥家の分家と考え、將軍御所の仏教儀礼を撰閥家の格付けにふさわしいものに調えようとした。そのため、三室戸僧正道慶をはじめとした九条家ゆかりの高僧が鎌倉に下り、將軍家のために修法や加持祈祷を行っていった。一方、源家將軍とのつながりから鎌倉に進出していた園城寺は、公暁の師にあたる本覚院僧正公胤の法流から、如意寺を継承する円意の法流へと法流の交代がおきた。

將軍御所には京都から下ってきた高僧が験者として集まり、將軍家護持僧も制度化されたことで、將軍御所は鎌倉の密教の中心となっていた。それは、大規模な法会に式場を提供して導師を引き受ける鶴岡社務

を除く、勝長寿院以下の将軍家御願寺の地位低下を招いた。延暦寺が別当を継承する先例をつくって末寺化した勝長寿院を除く将軍家御願寺が将軍御所に出仕する験者の勤める役職となったことに象徴される。

将軍御所に出仕をする験者は、将軍家とのつながり、北条氏や有力御家人とのつながりで活動していくので、鎌倉の政局と無関係ではいられなかった。摂家将軍の時代には九条頼経の叔父三室戸僧正道慶が将軍御所で重きをなしたが故に寛元四年の宮騒動で九条頼経と共に失脚し、宝治元年の宝治合戦では三浦泰村の義兄であることから鶴岡社務定親が失脚し、北条時頼政権下で鶴岡社務に就任した隆弁が天台寺門流の全盛時代を築くことになる。隆弁は、正元元年の園城寺戒壇問題で鎌倉の密教の政治的実力を朝廷や延暦寺に認識させた。この時以後、京都の密教寺院が繰り広げる権力抗争は、鎌倉の出方を意識するようになる。

鎌倉の密教は、将軍家や武家の都鎌倉を護るために京都から一方的に伝授を受ける立場から始まった。鎌倉時代中期になると、鎌倉で展開した密教は将軍家を護持する密教として、京都から一方的に受容する受け身の時代が終わり、将軍家を護持する集団として政治的に影響力を持つようになり、本流である京都人々もその実力を認識するようになった。教学としてはまだ受容の段階にあるが、政治的に影響力を持つ集団として機能し始めたことが新たな段階に入ったと考えてよいところである。

註

- (1) 「前稿」では先行研究としてあげた平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇号、二〇〇〇年)・「鎌倉寺門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四九号、二〇〇九年)、櫛田良洪「真言密教成立過程の研究」(山喜房仏書林 一九六四年)、拙著『金沢北条氏の研究』第

三章「金沢北条氏と鎌倉の体制仏教」(八木書店 二〇〇六年)を、鎌倉時代の鎌倉に展開した密教の全体像を考えていく上で基礎研究となるものとして紹介した。本稿が扱う時期に関しては、平雅行「将軍九条頼経時代の鎌倉の山門僧」(『日本仏教の史的展開』塙書房 一九九九年)、同「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶—良瑜・光宝・実賢」(『待兼山論叢 史学編』四三三号、二〇〇六年)、同「鎌倉真言派と松殿法印—良基と静尊—」(『京都学園大学人文科学研究』三五号、二〇一五年)、湯山学「隆弁とその門流」(『鎌倉』三八号、一九八三年)など多くはないが、鎌倉で活動した密教の学侶を論じた研究がある。また、西

岡芳文「龍華寺聖教に見える中世鎌倉の密教修法の一断面」(『密教美術と歴史文化—権大僧正昇補・大日寺準別格本山寺格昇格・真鍋俊照博士古稀記念論集—』法蔵館 二〇一一年)は、称名寺聖教・龍華寺聖教といった鎌倉文化圏に残る資料をもとに中世都市鎌倉の視座から密教を研究したものであり、橋本初子「関東と密教僧—京の記録にみる「関東住」について—」(『三浦古文化』五五号 一九九四年)は、京都側の史料が書き残した鎌倉で活動した学侶を俯瞰した研究である。

- (2) 師資相承の先例から外れた伝授を繰り返したり、師の許しを得ずに無断で聖教を書写した宏教に対する真言密教本流の人たちの風当たりや批判は強い。しかし、宏教に対して破門・異端という処分はなく、宏教が関与した相承・伝授は正式なものとして認められている。宏教に対する専論は多くなく、真鍋俊照「禅遍宏教の動向—金剛峯寺・慈尊院・鎌倉下向」(『金沢文庫研究』二六五号 一九八一年)、同「高野山と鎌倉の禅遍宏教」(『仏教教理思想の研究 佐藤隆賢博士古稀記念論文集』山喜房仏書林 一九九八年)などがある。

- (3) 『吾妻鏡』承久元年七月十九日条。  
 (4) 平雅行「将軍九条頼経時代の鎌倉の山門僧」(『日本仏教の史的展開』塙書房 一九九九年)。

- (5) 源行頼の卒伝は『玉葉』治承四年七月十二日条。行頼・信光が皇嘉門院院司であったことは、『尊卑分脈』の傍注にみえる。源国行が九条兼実の職事であったことは、『玉葉』治承元年十二月二十八日条他類出する。

- (6) 拙稿「中原師員と清原教隆」(『金沢文庫研究』二八一号、一九八八年)。
- (7) 『吾妻鏡』貞永元年三月十五日条。
- (8) 永福寺別当の歴代を記した史料「東大寺興福寺并諸寺別当次第」は、「永福寺史料集成(稿)」五味文彦研究代表者『吾妻鏡と中世都市鎌倉の多角的研究』課題番号13320081)に翻刻がある。
- (9) 『平戸記』仁治元年十二月三十日条・『吾妻鏡』仁治二年正月八日条。
- (10) 「護持僧次第」(『続群書類従』第四輯上)。
- (11) 将軍家交代の理由が天変であったことは、『吾妻鏡』寛元二年四月二十一条。この時期の青蓮院門跡は、慈円・良快・慈源と九条家で継承された。快雅は、「慈鎮和尚四天王御弟子」(『溪嵐拾葉集』「弁財天縁起末」一 隆倫僧正宇賀勸請事)と伝えられている。
- (12) 『門葉記』・『阿婆縛抄』「天台座主記」(『続群書類従』第四輯下)。
- (13) 『阿婆縛抄』「五壇法日記」。
- (14) 「九条道家願文」(『鎌倉遺文』六七三三号)。
- (15) 鎌倉幕府は、後醍醐天皇が行った中宮御懷妊御祈を関東調伏の祈禱と疑いながらも、ついに現場を抑えて確かめられなかった(金沢貞顕書状「金沢文庫古文書」三七五号/整理番号六八五号)。この一件については、百瀬今朝雄「元徳元年の中宮御懷妊」(『金沢文庫研究』二七四号 一九八五年)で詳述されている。
- (16) 『吾妻鏡』寛元四年七月十七日条。
- (17) 平雅行「將軍九条頼経時代の鎌倉の山門僧」(『日本仏教の史的展開』塙書房 一九九九年)。
- (18) 『門葉記』「関東冥道供現行記」。
- (19) 『吾妻鏡』承久三年五月二十七日条。
- (20) 「三井統灯記」第四「別当次第」(『大日本仏教全書』史伝六)。
- (21) 拙著『金沢北条氏の研究』第五章「金沢北条氏と鎌倉の体制仏教」(八木書店 二〇〇六年)。
- (22) 鶴岡八幡宮が神道・仏教を兼修する総合的な社寺であったことは、「前稿」で述べている。鶴岡社務について論じるのは八幡宮の総体ではなく、社務を頂点とした密教の世界である。
- (23) 『吾妻鏡』寛喜三年十月六日条。同嘉禎元年六月二十九日条。
- (24) 「異国降伏祈禱記」(『神奈川県史』資料編二 古代中世(2)) 九二二号
- (25) 明王院別当は「血脈類集記」の傍注にみえる。『吾妻鏡』には、左大臣法印の通称で初出の建長四年十一月二十二日条から通世を記した文永三年六月二十四日条まで記されている。
- (26) 『吾妻鏡』寛元二年正月一日条。榎田良洪『真言密教成立過程の研究』第二編第六章四「久遠寿量院の問題」(山喜坊仏書林 一九六四年)。鎌倉末期が論点となるが、久遠寿量院別当職の相承をめぐる問題の研究には、三浦龍昭「久遠寿量院別当職について」(『鴨台史学』一号、二〇〇〇年)がある。
- (27) 榎田良洪前掲論文翻刻資料「久遠寿量院別当次第并遺跡得親事」。
- (28) 『吾妻鏡』元久元年九月十三日条が、右大将家法華堂別当の初見。
- (29) 『吾妻鏡』承久二年正月廿一日条。
- (30) 『吾妻鏡』貞応二年八月七日条、同元仁元年七月二十四日条。
- (31) 『吾妻鏡』建長五年五月十九日条。
- (32) 『吾妻鏡』正治元年六月二日条。性我の事績は、平雅行「鎌倉真言派の成立―文覚・性我・走湯山―」(『京都学園大学人文科学研究』四〇号、二〇一八年)で詳論されている。
- (33) 『吾妻鏡』建保元年九月二十八日条。
- (34) 中村翼「栄西門流の展開と活動基盤」(『年報中世史研究』三八号 二〇一三年)は、行勇の官僧としての立場を「幕府に奉仕した台密僧」と評価している。
- (35) 「鶴岡八幡宮寺諸職次第」(『鶴岡叢書』第四輯)。
- (36) 「東寺長者補任」(『続々群書類従』史伝部)。八条院三位局については、拙稿「高倉宮以仁王の家族と縁者」(『古代文化』六六巻四号 二〇一五年)。八条院・九条家・良瑜の関係については、平雅行「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良瑜・光宝・実賢―」(『待兼山論叢』四三 二〇〇六年)で詳論されている。
- (37) 『吾妻鏡』貞永元年十月十七日条。
- (38) 『吾妻鏡』建保二年四月十八日条。

- (39) 藤原教経の卒伝は『玉葉』建久元年三月二十七日条。経歴は、拙著『式部省補任』（八木書店 二〇〇八年）を参照。
- (40) 『金沢文庫古文書 第十輯』十二輯 識語篇。宏教の初名禅遍による書写が多い。称名寺聖教を基盤とした宏教の事績については、真鍋俊照「禅遍宏教の動向—金剛峯寺・慈尊院・鎌倉下向—」（『金沢文庫研究』二六五・二六六号、一九八一年）が詳しい。
- (41) 『血脈類集記』（『真言宗全書』）。
- (42) 定清と大門寺は、高橋慎一郎「鎌倉における御所の記憶と大門寺」（『中世都市の力』高志書院 二〇一〇年）を参照。
- (43) 『血脈類集記』（『真言宗全書』）、『金沢文庫資料全書 第九卷 寺院指図編』（神奈川県立金沢文庫 一九八八年）五七〇六一号は、宏教が建長五年に甘縄無量寿院で行った伝法灌頂指図である。
- (44) この記録については、『伝法灌頂雑要抄』（称名寺聖教、『金沢文庫古文書』六一二五号に抄出）が「正嘉二年〔戊午〕四月二十三日〔壁<sup>（寄）</sup>月<sup>（傳）</sup>〕、於武蔵国倉城郡六連庄内金沢村、点越後守平実時堂廊伝之」と記すのに対し、「血脈類集記」（『真言宗全書』）は「弘長二年〔壬戌〕五月五日、於関東六浦金沢律寺受之」と記録している。『血脈類集記』と『伝法灌頂雑要抄』では、灌頂の時期が異なっている。ここでは、成立年代の古い『伝法灌頂雑要抄』の記述に従っておく。
- (45) 田島光男「西院流伝法灌頂相承血脈鈔」について」（『三浦古文化』四〇号、一九八六年）。
- (46) 「東寺長者補任」（『続々群書類従』史伝部）。
- (47) 隆弁については、拙稿「鶴岡社務隆弁と鎌倉の体制仏教」（『金沢北条氏の研究』所収 八木書店 二〇〇六年）。
- (48) 「鶴岡八幡宮寺諸職次第」・「鶴岡八幡宮寺供僧次第」（『鶴岡叢書』第四輯）。
- (49) 『吾妻鏡』建長五年五月二十三日条。同条で、『吾妻鏡』は良信の年齢を八十一歳と記し、勝長寿院前别当と役職を記している。良信から最信への别当交代は、入滅以前に行われている。
- (50) 千田孝明「史料紹介『日光山别当次第』（慶長十四年写）—『当山秘所并代々别当次第』—」（『栃木県立博物館研究紀要—人文—』二十三号 二〇〇六年）。
- (51) 了心が栄西の門流に属することは、『元亨釈書』第七「慧日山辨圓」に「有了心者、其徒之彦也」と記されている。禅密兼修の立場を取り、天台密教葉上流を継承する官僧として法印に昇ったのであろう。一方で『元亨釈書』第六「宋国道隆」では「又杖錫赴相陽、時了心跪龜谷山、隆掛錫於席下、副元帥平時頼聞隆之来下、延居常楽寺」と、鎌倉に居る栄西門流の筆頭格の扱いを受けている。
- (52) 『吾妻鏡』にみえる松殿法印が二人の人物であることは、平雅行「鎌倉真言派と松殿法印—良基と静尊—」（『京都学園大学人文科学研究』三五 二〇一五年）で整理されている。
- (53) 『吾妻鏡』文永三年六月二十日条。
- (54) 『吾妻鏡』正嘉元年八月二十三日条。
- (55) 『三井寺灌頂脉譜』（国立公文書館所蔵本）。
- (56) 『吾妻鏡』建長六年十二月二十六日条。
- (57) 園城寺戒壇問題を整理した基礎的研究は、平岡定海「園城寺の成立と戒壇問題」（『日本寺院史の研究 中世・近世編』吉川弘文館 一九八八年）。正元の園城寺戒壇問題は、園城寺に初めて朝廷から三昧耶戒戒壇勅許がおりた画期となる事件である。
- (58) 鶴岡社務隆弁とその弟子顕弁が園城寺戒壇問題に関わったことは、註一拙著で、文保の園城寺戒壇問題を中心に述べている。文保の園城寺戒壇問題では、顕弁は隆弁の再来として高い期待を持って迎えられ、戒壇を建立して顕弁の弟子三人に伝法灌頂を強行した。
- (59) 『群書類従』帝王部。

表一 将軍家御祈五壇法一覧

年月日	目的	場所	中壇(不動)	降三世	軍荼利	大威徳	金剛夜叉	出典
建保4・・	記載なし	鎌倉	忠快(山)	実暁(山)	快智(山)	為範(山)	良信(山)	阿・門
安貞元年11月24日	将軍家御例	鎌倉	定豪(東)	寛基(山)	道禪(寺)	定情(東)	円伊(寺)	吾
嘉禎3年6月22日	丈六堂供養	将軍御所	良瑜(東)	道禪(寺)	賢長(東)	寛耀(東)	尊嚴(東)	吾
寛喜3年4月11日	天変御祈	鎌倉	道禪(寺)	観基(山)	頼暁(山)	円意(寺)	定親(広)	吾
暦仁1年4月4日	将軍御祈	六波羅殿	道慶(寺)	快雅(山)	実賢(東)	聖増(東)	成嚴(東)	門・統群
仁治3年11月29日	関東将軍大納言殿御祈	鎌倉	道慶(寺)	円意(寺)	賢長(東)	猷性(寺)	承快(山)	門
寛元1年2月10日	関東将軍大納言殿御祈	鎌倉	道慶(寺)	快雅(山)	良信(山)	円意(寺)	賢長(東)	門・統群
寛元2年3月14日	関東将軍家御祈	鎌倉	快雅(山)	道禪(寺)	猷尊(寺)	猷性(寺)	定親(東)	統群
寛元2年5月15日	関東大納言入道殿	鎌倉	快雅(山)	道禪(寺)	猷尊(寺)	猷性(寺)	定親(東)	門・統群
寛元2年9月1日	関東大納言入道殿	鎌倉	道慶(寺)	猷尊(寺)	猷性(寺)	成恵(山)	定親(東)	門・統群
寛元3年5月15日	関東大納言殿入道殿	鎌倉	道慶(寺)	賢長(東)	公円	承快(山)	寛位(東)	門・統群
寛元3年6月27日	関東大納言殿入道殿	鎌倉	道慶(寺)	道禪(寺)	印円(山)	隆弁(寺)	寛位(東)	門・統群
寛元4年4月2日	関東大納言殿入道殿	鎌倉	良禪(山)	円意(寺)	賢長(東)	猷性(寺)	成恵(山)	門・統群
弘安4年閏7月3日	異国御祈	鶴岡八幡宮	隆弁(寺)	円勇(寺)	頼弁	承俊(寺)	隆成	鶴

阿=『阿娑縛抄』・門=『門葉記』・吾=『吾妻鏡』・統群=『統群書類従』所収「五壇法日記」・鶴=『鶴岡社務記録』

表二 成源年譜 (寛喜元年から寛元四年)

年月日	場所	目的・役割	修法等事績	僧官僧位等	出典
寛喜元・	京都	補任	延暦寺宝幢院檢校補任		僧官補任
寛喜元・12・21	京都	讚衆	良快授伝法灌頂 於尊勝院	僧都	門
寛喜3・10・13	京都	脇壇	立太子御祈五壇法 導師親嚴	法印権大僧都	阿
貞永元・閏9・17	京都	護摩壇	関白御祈熾盛光法 導師良快	成源法印	門・阿
天福元・8	京都	導師	藻壁門院御産御祈六字法	成源法印	門
暦仁元・1・28	鎌倉	護持僧	将軍家上洛護持僧	岡崎法印	吾
暦仁元・4・25	京都	唄師	九条道家出家	岡崎法印	吾
暦仁元・9・21	京都	讚衆	快雅授結縁灌頂 三条御堂	法印	門
暦仁元・10・13	京都	護持僧	将軍家上洛の護持僧	岡崎法印	吾
暦仁元・	京都	補任	延暦寺宝幢院檢校還任		僧官補任
延応元・5・5	鎌倉	導師	将軍家御不例御祈炎摩天供	岡崎法印	吾
延応元・8・8	鎌倉	加持	二棟御方御着帯	岡崎僧正	吾
延応元・10・13	鎌倉	導師	兵庫頭藤原定員堂供養	岡崎僧正	吾
仁治元・3・9	鎌倉	導師	将軍家尊勝陀羅尼書写供養	岡崎僧正	吾
仁治元・4・10	鎌倉	御祈衆	将軍家若君御祈衆補任	岡崎僧正	吾
仁治3・正・24	京都	護摩壇	九条道家御祈熾盛光法 導師慈源	権僧正	門・阿
寛元元・4・8	鎌倉	導師	将軍御所持仏堂仏生会	岡崎僧正	吾
寛元元・閏7・2	鎌倉	導師	将軍御所持仏堂供華結願	岡崎僧正	吾
寛元元・9・25	京都	大阿闍梨	二条良実結縁灌頂	権僧正	門
寛元3・7・5	鎌倉	戒師	前将軍九条頼経出家	岡崎僧正	吾
寛元4・5・14	鎌倉	導師	天変月蝕御祈薬師護摩	岡崎僧正	吾
寛元4・7・11	鎌倉	同行	前将軍九条頼経帰洛	宰相僧正	吾